テイルズオブジアビス　～ミュウの異世界冒険記～

にぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブジアビス　～ミュウの異世界冒険記～

【Ｎコード】
Ｎ３０２８Ｚ

【作者名】
にぃ

【あらすじ】
エルドラントの最終決戦から幾分か時が経過したある日。
ミュウはチーグルの森にて未だルークの帰りを待ち続けていた。
悲しみに耽るミュウ、そんな彼に突然運命の光が瞬く。
絶体絶命のピンチにミュウを救った光とは――
そんな有りがち設定ではありますが、ミュウの成長物語を最後まで見届けてくれると光栄です。

※ちなみにこの小説も以前別のサイトにて投稿していたものです。
完結もしていますし、バックアップもそのまま残っているので、加筆修正しながら投稿するだけの簡単な作業です。

第1話　いきなりピンチ！？　ＶＳ骨（前書き）

初めましての人は初めまして！
ＴＯＳからの人はこんにちは！
今回投稿させて頂くのは、今からするとちょっと古い（？）だけど名作中の名作、ジアビスの長編です。
歩いて喋るソーサラーリングことミュウが主役の成長物語、最後まで見届けてもらえると光栄です。

第1話　いきなりピンチ！？　ＶＳ骨

――よしっ！　お前は今日からブタザルだ！

大好きなご主人様が付けてくれた名前。

――なんだとっ！　ブタザルのクセに生意気なっ！

尻尾を振りまわしたり、頬を引っ張ったり、時々意地悪だったけど……

――俺、変わるよ……変わりたい……

『変わる』と誓ったあの日から、前以上に優しくなったご主人様。

――よしっ、ミュウ！　俺が合図をしたら火を吹くんだぞ！

一緒に戦った日々、モンスターの威嚇や、障害を駆除するのが自分の役目だった。

そして……

――ミュウ、お前は仲間たちの元へ帰れ。

それがエルドラントで訊いた最後の言葉……

それ以来、ご主人様は僕の前から姿を消した。

緑浴に満ちた幻想的な森林。
チーグルの森と呼ばれるその森林は、地名通り聖獣チーグル達が群れを成して暮らしている。
その最深部には堂々と聳え立つ巨木が存在する。
チーグル達はその巨木の中を住処に生活を送っていた。

チーグルは仲間意識の高い種族である。今までも協力し合って生活を送っていた。彼らに抗争と言う言葉は似合わない。
だが、そんな彼らの輪から外れ、ずっと悲壮な表情を浮かべながら黄昏れている一匹のチーグルがいた。

お腹に『ソーサラーリング』という貴重品を身につけ、青い毛をした子供チーグル――

「あの子……森へ返ってきてからずっと元気ないわね」
「そうだね。僕達に何か出来ることがあればいいのだけれど……」
仲間のチーグル達が元気のないその子を見て、同情の眼差しを向ける。
「ずっと慕っていた主人が死んじゃったんでしょ？　今はそっとしてあげておいた方が――」
茶色の毛のチーグルがその言葉を発したとき、ずっと仲間の言葉に無反応だった彼の長い耳がピクッと反応を示した。
そして彼――ミュウは威嚇するように毛を逆立てながら言った。
「ご主人様は死んでないですのっ！　必ず生きて返ってくるって約束……約束を……」
言葉を詰まらせたと思ったら、ミュウは突然大粒の涙を流した。
「（約束……したはずですの……でも……どうして帰ってこないですの……？）」

ミュウには主人と慕う人間が居た。
主人の名はルーク・フォン・ファブレ。彼はとある技術で人工的

に生み出されたレプリカという存在だった。
オリジナルよりも力も劣る彼は、当時『自分の価値』を見失いがちであった。自分がレプリカだということを卑下し、悲観的になることもしばしばあった。

しかしミュウはそれでもルークを慕っていた。
オリジナルである男よりもレプリカであるルークだけを慕った。
その一途な思いがどれだけルークの救いになったことかミュウは知らないが、それだけルークのことが大好きだった。

そして数年前、ルークは栄光の大地エルドラントにて、ようやく『自分の生まれた意味』を見つけることができた。
しかしそれは自らの命に危険を侵すものでもあった。
ルークは、ミュウに、そして仲間達に必ず帰ってくることを誓い、崩れゆく都市の中で、光に包まれていった。
それ以来、ルークの姿は見ていない……

「……っ！」

ミュウは大粒の涙を浮かべたまま、ダッシュでその場を去って行った。
仲間達が静止するように声を上げていた気もするが、感情的になったミュウの耳には届いていなかった。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

涙を風に靡かせ、地を濡らしながら、ミュウはただひたすらに走る。
仲間に涙を見られたくないわけではなかった。でもなぜかあの場には居られなかった。
ミュウはただ無心で走っていた――いや、どこでもいいから一人になれる場所を求めてひたすら走っていた。
「はぁ……はぁ……ふぅ～～」
住処とはかなり離れた場所でミュウは一息吐く。走っている内に涙は乾いていた。
しかし、渇いたのは涙だけではない。
「喉が渇いたですの～」
小さな身体で三十分近くも走った為、ミュウの疲れはピークに達していた。
ミュウは近くの湖に身体を乗り出し、ちゅうちゅうと水を飲み始めた。
「……ぷはぁ～っ」
たくさんの水を身体に飲み入れたミュウは、そのまま水面に浮かぶ自分の顔をじっと見つめた。
その時に思うことも、たった一人のご主人様のことだけ……
「（ご主人様……今、どこにいるですの？　会いたいですの……今すぐにでも――）」

そんな切なる願いを込めるミュウ。

ざっ……

その時、背後から足音に似た音が耳に入ってきた。

「（みゅみゅっ！？　この重みのある足音、冷たいようでどこか暖かさを感じるオーラ……ま、まさかっ！？）」

ミュウはこの足音に聞き覚えがある。期待に膨らみを混めてミュウは静かに振り返った。

そこに居たのは――

「ご、ごごごご、ご主人様！　帰って……帰ってきてくれたですの～～～～！」

ミュウはたまらず、背後に居た人影に抱き付いた。

「ご主人様、ミュウはこの日をずっと心待ちにしてたですの、またお会いできてうれしいですの、すりすり～ですの。あぁ、このゴツゴツとした感触、たくましい腕、冷たい温もり、間違いなくご主人さ――」

ぎゅむっ！　びった～～～んっ！

ミュウが軽く暴走モードに入っていた最中、人影は突然ミュウの

耳を引っつかみ、地面に思いっきり叩き付けた。

「い、痛いですの～。ご主人様何するです……あぁっ！？」

叩きつけられたことで少し平静さを取り戻したミュウは、改めてその人影を見て驚きの表情を表した。

「お、お前は……ご主人様ではないですの～っ！」

ミュウ曰く、ゴツゴツとした感触、たくましい腕、そして冷たい温もりを持った人影は臨戦体制に入っていた。

どうやらミュウがいきなり飛び付いた行為が、この相手は敵意を持っていると勝手に勘違いしてしまったみたいである。

「お、お前は……たしか……死霊スケルトンですの！」

死霊スケルトン、一言で言えば強暴な骸骨。

物理攻撃に耐性があるとは言え、水に弱いわ、風にも弱いわで、弱点の方が多く見積もられているという、言わば雑魚モンスター。

補足しておくが、ルークの容姿はこんな骸骨ではない。

共通点ゼロのスケルトンをどうやったら自分のご主人と間違えられるのか、ミュウに問いたいくらいだ。

しかし、ミュウはそれどころではない危機に面している。

「みゅみゅ～っ！　ここは逃げるですの～！」

即座に背を向け、ダッシュで逃走に移るミュウ。

相手が弱点だらけの雑魚とはいえど、子供チーグルに勝てるほど甘い相手ではない。逃走と言う判断は正しい選択だったのかも知れない。

だが、一度敵愾心を見せられたスケルトンもミュウの後を追い掛けてくる。鈍足そうな姿とは異なり、意外に足が早い。

でも、ミュウは足の早さだけは自信があった。こんな雑魚骸骨などすぐに突き放すことはくらい軽いはずである。

しかし、スケルトンと自分との差はむしろ詰まってきていた。

どうやら先ほどの全力疾走の疲れがまだ残っているようであり、足の節々に痛みが生じている。

「みゅみゅ～っ！　大体なんでスケルトンがチーグルの森にいるですの！？　あいつはアクゼリュス第１４坑道にしか出没しないのではなかったのですの～！？」

ちょっとしたプチトリビアをぼやきながら必死に逃げるミュウ。

一見、余裕があるようにも見えるが、実際はかなり切羽詰っていた。

「（このままでは確実に追い付かれるですの……仕方ないですの……ここは覚悟を決めて、ミュウは戦うですの！）」

決意の炎を胸に抱き、覚悟を決めたミュウはクルリと振り向いてスケルトンの正面に対峙した。

「ふぁいあ～っ！」

偶然にもミュウの突然の攻撃は不意打ちの効果を放った。

スケルトンは回避する間もなく、腹部にミュウファイアが炸裂する。

「グガぅっ！」

スケルトンは奇声を上げるが、ミュウファイアが命中した腹部には特に損傷は見当たらなかった。

ほとんどダメージを受けていない様子である。

スケルトンは右手に構えた棍棒を振りかざし、一気に振り下ろす。

ミュウはギリギリの所で攻撃を交わすと、再び背を向け全速力で走り出した。

「や、やっぱりダメですの～～～～～っ！　勝てっこないですの～～～～っ！」

半べそを描きながら、走るミュウ。

逃げ切れない、戦えない、怖い、の三拍子が揃った今、ミュウは絶体絶命だった。

そんな絶体絶命のミュウの脳裏に浮かんだのは、かつての仲間達の姿だった。

「（ティアさん、ガイさん、ジェイドさん、アニスさん、ナタリアさん！　助けてですの……っ）」

ミュウは必死に心中で助けを乞う。何も出来ない自分の無力さを

悔やみながら……
そして、ミュウの脳裏に自分にとって一番大きな存在が浮かび上がる。
「（ご主人様……っ！　助けて……ですのっ！）」
スケルトンはついに自分の間合いの中にミュウを捕えた。
今度こそ攻撃が当たると核心したスケルトンは棍を大きく振り翳す。
――だがその時、ミュウの身体に異変が発せられていることに気付いた。
ミュウのお腹に眩い光が発せられていた。
いや、正確に言うと、ミュウのお腹に着けている装飾品が光りを放っている。
「（こ、これはどういうことですのっ！？　ソーサラーリングが光っているですの！）」
光は更に眩しく、そして強く、光を放ち続けている。
目を開けられないほどの光が辺りを包む。
その中心に居たミュウはどうすればいいのかわからずオロオロするばかりであった。
そして爆発的な光がソーサラーリングを中心に放たれた。
「みゅっ！？　みゅみゅみゅ～～～～～っ！」
ミュウの叫び声だけが、辺りに轟く。その叫び声は徐々に遠ざか

って行くように聞こえた。
そして、瞬時に光は収まった。
そこにはミュウの姿が完全に消え失せていた。

――ちぃ、座標がずれたか……
声がする。どこからするのかは分からない。
――まぁいい、この世界に転送は完了した。
だけど、その声は異様な威圧感を放っている。絶対的な力を持つ者が放つ恐ろしいオーラ。
――後は部下に回収を急がせるとするか……
それっきり声は聞こえなくなる。ほっと胸を撫で下ろし、安堵する。
そしてミュウの意識はゆっくりと回復していくのであった。

第1話　いきなりピンチ！？　ＶＳ骨（後書き）

見てくれてありがとうございました！
それにしても４００００文字制限はすごい！
これなら思ったよりも早く完結できるかもです。
第２話は明日投稿予定。１日１本上げることを目標に頑張っていきます。

第2話　またもやピンチ！？　異世界は敵だらけ（前書き）

ソーサラーリングアクションはアビスが一番好きでした。
最近のテイルズはソーサラーリングすら無くなっちゃって少し寂しいです。

第2話　またもやピンチ！？　異世界は敵だらけ

「……みゅ？」

目を覚ました時、まず眼前に広がっていたのは雲で覆われた真っ白な空だった。

ゆっくりと上体を起こし、辺りを見渡す。

「みゅっ！？　こ、ここはどこですの～！？」

周りに見えるのはゴツゴツとした岩石のみ、緑も水もないただ岩だけが存在する山脈だった。

デオ峠と似ているが地形が全く違う。少なくともさっきまで自分の居たチーグルの森ではないことだけは確かだった。

「ミュウはなぜこんな場所に居るですの？　たしかスケルトンに襲われて、必死に逃げて、それからソーサラーリングが光って……って、そうだ！　ソーサラーリングですの！」

たぶん、事の発端は突然光ったソーサラーリング。

ミュウはソーサラーリングに異常が発生したと考え、リングをまじまじと見つめる。

リングの異常はすぐに発見することができた。

「みゅっ！？　な、なんですのこれはっ！？　リングに付いている穴が増えているですのっ！」

ソーサラーリング――元々は三つの穴にそれぞれ音素の譜を刻むことにより、様々な能力を発する便利アイテム。

今までもその力で難解なダンジョンを攻略してきた。

ミュウファイアを出すことができる――第５音素の譜。
ミュウアタックを使うことができる――第２音素の譜。
ミュウウイングを広げることができる――第３音素の譜。

そして、更に空洞の三つの穴が追加されていた。装備者のミュウ自身も見覚えがない穴。
よく見ると、リングの形自体も大きく変わっていた。

「まぁ、それはそれとして……」

何の問題解決も至ってないが、ミュウは『それはそれ』の一言で片付けた。

ぐぅ～

「お腹が空いたですの～……」

全力疾走二回の後に充分なお昼寝（気絶とも言う）、ここまで条件が揃ったら当然次に来るのは空腹である。
だが、周りに人も居なければ、食料になりそうなものも見当たらない。あるのは岩石の山のみ……

――なんて思っていると、後方から誰かが近づいてくる足音が聞こえてきた。

「みゅうぅぅっ！　人ですの！　人がいるですの～～！」

足音の正体を人影だと察したミュウは、大喜びで人影の元へと駆

け寄った。

「す～み～ま～せ――♪」

その人影の姿を見て、ミュウは思わず凍り付いた。

先ほどのチーグルの森でもそうだが、ミュウは考え無しに行動を起こす悪い癖がある。

ミュウは声を掛けたことをすぐに後悔した。

「みゅみゅみゅ～っ！　なんでレプリカナイトがこんな所にいるですの～！？」

近づいてきた人影の正体は、かつてルーク達を大いに苦しめたレプリカナイトの大群であった。

レプリカナイト――ＨＰが高い上、攻撃力、防御力も共にバカにならない強さを誇り、弱点も特にない上級部類の魔物。

ルーク達もかつてエルドラントやフェレス島廃墟群にて、こいつにはかなり苦しめられていた。

例え、先ほどミュウが苦しめられたスケルトンが１０匹居たとしても、このレプリカナイト一匹にすら遠く及ばないだろう。

そのレプリカナイトが大群でいるのだ。絶体絶命とはこの状況にこそ相応しい言葉である。

「え……えっと……ですの」

見ている。大勢のレプリカナイト達はミュウの顔をじっと見ている。
背中に冷や汗がダラダラと流れる。その勢いは徐々に増してゆく。
「……りんぐ……はっけん……ほそく……する……」
レプリカナイト達のリーダー（？）らしき者が不意に口を開く。
単純な単語の羅列だが、さすがのミュウにもその言葉の意味していることは分かった。
レプリカナイト達は一斉に剣を構え、剣先をミュウの方へ向ける。
「みゅっ！？　みゅみゅみゅっ！？」
明らかに相手は敵意を示している。敵意を持っていなければ剣を向けるはずがない。
「と、とりあえず……逃げるですの～～っ！！」
本日3回目の全力疾走。
だが、当然レプリカナイト達も追ってくる。
ナイト達はスケルトンよりも、そしてミュウよりも速かった。
「なんで最近の魔物達はこんなに足が速いので～す～の～！」

今度は大べそを描きながら一生懸命に逃げるミュウ。
チーグルは魔物ではないのか？　という素朴な疑問も浮かぶが、あえて今はそこに触れないことにしよう。

逃げる最中、ふと前方に今にも崩れそうな大きな岩脈が目に映った。
ミュウはそれを見てある打開策を閃いた。

「（そ、そうですのっ！　あの岩脈の根元をミュウアタックで崩すですの。そうしたら崩れた岩石で追跡の足を止められるかもしれないですのっ！）」

ミュウの見解は正しかった。
岩脈は根元を崩すと、いとも簡単に崖崩れが起こる。
そうすれば確実にナイト達の足を止めることはできるだろう。
しかしそれはミュウ自身にも危険が及ぶことでもあった。

「（危険かもしれないけど、今はそんなこと言っていられないですの！　覚悟を決めて……せ～のっ！）」

ソーサラーリングの第二音素の譜が光る。
するとリング全体が土色に変色した。

「あた～～～～～～～～～～～～～～～～くっ！！」

ミュウアタックを岩脈の根元に向けて放とうとした瞬間、今度はリングに連動してミュウ自身の身体も土色に変色する。

こんなの初めてなことであるが、ミュウはそれ以外の所で驚愕することになる。

ドガッシャァァァァァァァァ～～～～～～～～～～～ンッ！！

「「「……っ！？」」」

異常な炸裂音が辺りに木霊する。その音に驚き、レプリカナイト達は思わず足を止めた。

ミュウアタックが炸裂した岩脈には、洞穴並の大きな空洞が出来ていた。

今のアタックの威力は明らかに異常だった。

いつもなら小さな岩を砕くことくらいしか出来ないくらいの威力しかないはずなのに……

みし……みしみし……ピキキ……

ミュウが衝撃を与えた箇所を基点に、岩脈は少しずつヒビ割れが発生している。

そして——

ガラガラガラガラガラガラガラガラガラっ！！

大きくヒビ割れた岩脈は一気に崩れ始めた。

「みゅっ！？　みゅうううううっ！」

ミュウの断末魔が響く中、レプリカナイト達は雪崩のように崩れてきた岩石の下敷きとなっていたのだった。

「あ、危なかったですの……」

レプリカナイト達が生き埋めになった現場より遥か上空。
いち早く危険を察したミュウは、咄嗟の判断でミュウウイングを広げ、上空へと避難していた。

「（それにしても、今のアタックの威力は何事ですの？　あんな凄まじい威力、今まで見たことがないですの……）」

ミュウはそんな考え事をしながら、羽（耳？）を羽ばたかせ、適当に思うが侭の方向へ進んだ。

「（やっぱり、ソーサラーリングに何か異変が起きているですの……そうとしか考えられな――）」

考え事の途中で、ふとミュウはある事実に気付いた。

「みゅぅッ！？　何でミュウは空を自由に飛べているですの！？」

ミュウの驚愕は当然である。ミュウウイングは本来、『飛ぶ』というよりは、『浮く』だけの力だったのだから……

つまり、上下に移動出来ても左右にはできないという、何とも中途半端な力だったのだ。

しかしミュウは今、自分の思うが侭に空中移動を出来ている。決してただ風に流されているだけとか情けない理由などではない。

「???」

頭にクエスションマークをいくつも浮かべて悩むミュウ。

しかし、いくら悩んだところでプチトマトサイズの脳ミソでは、この難しい見解を導き出すことなどできっこなかった。

だが、ミュウにも一つだけ理解できたことがある。それは自分が一番肌に感じたこと……

「ミュウの――いや、ソーサラーリングの力がパワーアップしているですの……」

パワーアップしたミュウウイングの力によって、ミュウは楽々と山岳地帯を抜けた。

そして、お腹を空かせながら飛ぶこと数十分、ようやく街らしき景色が見えてきた。

「や、やっと食べ物に在り付けるですの～。長かったですの～」

街を発見すると、ミュウは大喜びで急降下し、街の入り口の前で綺麗に着地した。
エンゲーブを彷彿させるような美しい農園が広がり、街の中央には噴水広場があるという豊かな街だ。
噴水広場の中央には、なぜか怖い顔をしたおっさんの石造がドーンと聳え立っている。
これさえなければとても好感の持てそうな街である。
早速街へ入ると、住人達による手荒い出迎えが待っていた。

「おい、なんだアレ？　変な動物がいるぞ」

街の子供の一人がミュウを指差しながら言った。

「本当だ。モンスターには見えないな。サルか？」
「いや、あの顔はブタだろ？」
「サルブタっ！　あいつの名前はサルブタで決定～♪」

ミュウは何もしていないのに、続々と野次馬達が沸いてきた。

「違うですの！　ミュウの名前はブタザルですの！」

野次馬が勝手に付けた名前に文句を述べるミュウ。

『ブタザル』というのは主人であるルークがつけてくれた名前。
名前の由来はルーク曰く『ブタとサルを足して2で割ったような顔をしているから』らしい。
そんな真意を知っているのかどうかは知らないが、ミュウはなぜかこの名前に執着している。

「おい、サルブタ……」
「だから違うですの！　ミュウの名前は――」
「これ食うか？」
そう言って差し出してきたのは、レーズン入りのクッキー。
「食べるですの～♪」
音符マークを付けてまで差し出されたクッキーに飛び付くミュウ。
「サルブタ、これも食え！」
「喉が渇いたでしょ？　サルブタちゃん、これをお飲み」
何もしていないのに、あちこちから押し寄せる食べ物のプレゼント攻撃。ミュウは頬を緩ませながらそれらを一つ一つ嬉しそうに受け取った。
「サルブタ、何か芸をやったらこっちのお菓子もあげるぞ」
そう言って男の子が差し出したのは、見るからに美味しそうなチョコレート。
「（あ、あれは、チーグルの森で流行っているボール型チョコレート（いちご味）ですの！　あ、あれは何としてでもゲットしたいですの～）」
流行りの品を見るや、ミュウの瞳に小さく炎が上がる。
決意に満ちた今なら、何でも出来そうな気がしてきた。
「一番、ミュウことサルブタっ！　口から火を吹くですの～♪」

『おぉ～っ！』と野次馬から歓声が上がる。ミュウはこの瞬間、自分の名前に誇りを捨てた。

ミュウは大きく息を吸い込み、力をためる。

ソーサラーリングの第5音素の譜が光り、ミュウの身体全体がリングに連鎖して赤く変色した。

ミュウは上空を見上げ、力を解き放つ。

「ふぁいあ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～っ！！」

ゴオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォッ！！！！

ミュウの口を基点に上空へ放たれた炎は、直径数十メートルの熱波を作り、物凄い勢いとスピードを保ったまま、雲の上へと消えて行った。

「「「…………」」」

野次馬達は、その炎の威力と規模に圧倒されたまま、硬直した。

「（し、しまったですの……ソーサラーリングのパワーアップのことすっかり忘れてたですの～！）」

後悔しても時すでに遅し。硬直状態である野次馬達の目は、脅威

のモノを見ているかのように引きつっていた。
「い、以上、ミュウの火吹きでしたの～♪」
苦笑いを浮かべながら一礼をするミュウ。
そして、それが起爆となって、野次馬達の停止していた脳が再起動した。
「ば、化け物だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「やっぱりモンスターだったんだ！　おい、保健所……じゃない、警備兵を呼べ！」
「この姿は我々を油断させるまやかしに違いない！　きっと正体は火吹き竜か何かだ！」
武器を用意してくる者、兵を呼びに行く者、石を投げてくる者、街人達は一丸となり一匹の共通の敵を前に行動を起こした。
どうやら仲間意識の高い街みたいである。
本来ならば美しい人間愛に満ちている街と言うべきだが、ミュウにしてみればただの早とちり集団でしかない。
まぁ、こうなった根源はミュウにあるわけだが……
「みゅうううううううっ！　ち、違うですの！　誤解ですの！　皆さんに危害を与えるつもりは……ふがっ！」
必死に弁解も虚しく、一人の子供が投げてきたボール型チョコレート（いちご味）がミュウの鼻の中に見事命中した。
それに続き、街人達の怒涛の投擲攻撃が押し寄せてくる。
耐久力の低いミュウにとっては、石をぶつけられるだけでも大怪我を負いかねない。
さすがにもうこの場に留まることは不可能と察したミュウは、慌

ててミュウウイングを広げた。

「みゅみゅうううっ！　ご、ごめんなさいで～す～の～！」

悲鳴に近い謝罪の言葉を残し、ミュウは慌てて飛び立ち、街を後にしたのだった。

第2話　またもやピンチ！？　異世界は敵だらけ（後書き）

見てくれてありがとうございます！
今更ですけど文章見づらいのかもって思いました。
行間を挟んだ方がいいのかなぁ……
その意見も含めて感想も待っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3028z/

テイルズオブジアビス　～ミュウの異世界冒険記～

2011年12月11日11時47分発行